

ガジャシンハ考

駿河台大学心理学部
佐古年穂

1. はじめに

アンコール・トムの王のテラスには、ガルダと並んでガジャシンハとされる像（図1左）が並んでいる。一見シンハ（獅子）の像にしか見えない。これがなぜ「ガジャシンハ」とされるのかとの疑問が、この論考の出発点である。

ガジャシンハは、ガジャ（象）の頭とシンハ（獅子）の身体をもつ神獣である。興味深いことに、ベトナムのミーソン遺跡（7世紀-13世紀）には、インドに由来すると考えられる、後ろを振り向き、鼻を長く伸ばした姿で、長い牙を有するガジャシンハが見られる（図2）。また、正面を向き、鼻を高く掲げたガジャシンハが、チャムの遺跡には登場している（図3）。

Roberts（2003：140）も指摘するように、インド神話の中で、ガジャシンハはとくに重要な位置を占めることはなかった。*Purāṇic Encyclopaedia* や一般的なインド神話辞典には、その項目すら見られない。本来はシンハであった、九曜（navagraha：九つの惑星）中のブダ（Budha：水



図1 Angkor Tom 筆者撮影（以下◎）



図2 My Son ◎



図3 Museum of Cham Sculpture



図 4



図 5



左右反転



図 6

星)の乗物が、ガジャシンハとなっている例(図4、5)がわずかに見受けられるだけである。しかも、図5のガジャシンハは、シンハの鼻の上にとってつけたように象の鼻が乗せられているだけである。

神話的伝承が乏しいにもかかわらず、ガジャシンハは、現在のカンボジアの国章に現れるなど、クメール文化圏においては、重要な存在となっている。ただし、国章における左側のガジャシンハも、鼻と牙を除けば、右側のシンハとまったく同じである(図6)。

しかし、ガジャシンハに関して考察する材料がまったくないわけではない。興味深いことに、バンテアイ・スレイ(967頃)では、その多様なガジャシンハの中に、アンコール・トムの王のテラスのガジャシンハに至る変容の過程、ガルダにとって代わってヴィシュヌの乗物となる端緒を見ることができる。この論考は、そのバンテアイ・スレイでのガジャシンハの変容の過程を明らかにすることを主な目的とする。そして、同様に、シンハの要素を強めていく南インドを中心とするガジャシンハ／ヤーリの変容にも検討を加える。

なお、ここでは、各レリーフ等に関しては、遺跡の年代を用いて、その新古を考察したこと、そして、時にインターネット上で手に入れた写真を使って考察していくことをご容赦願いたい。

2. Tyson R. Roberts によるガジャシンハ研究

ガジャシンハに関するまとまった研究は、Tyson R. Roberts (2003)の網羅的研究以外に見つけることができなかった。

Robertsは、スールヤヴァルマン2世(1113-1150頃)時代のガジャシンハを、「スールヤヴァルマン2世のガジャシンハ」と呼んで、とくに重視する。そして、その「スールヤヴァルマン2世のガジャシンハ」に至る、クメール文化におけるガジャシンハの展開を、次の4段階によって説明している。

まず、Roberts(2003:152)は、Darsheimer(2001:184-187)に基づき、サンポール・プレイクック(7-8世紀)とTuol Angの花綱の末端の神獣(Robertsの主張するキールティムカではない)を、明確な形でのガジャシンハの初例とする。その理由は、その神獣が持ち上げた象のような鼻と短い象のような歯(stout)をもつことだとする。Robertsは図を挙げていないので、確認できない。ただし、図7のようなサンポール・プレイクックの「マカラ」を「ガジャシンハ」と呼ぶののだとしたら、その主張には同意できない。



図7 Sambor Prei Kuk



図8 East Mebon (Roberts 2003 : 154)



図9 Baphuon
(Roberts 2003 : 154)



図10
Wat Phnom Ta Mau
(Roberts 2003 : 148)



図11
Preah Khan ©



図10b



図11b

次に、Roberts (2003 : 152) は、初めてガジャシンハがその全身を現したのは東メボン (952) (図8) であるとし、同様の頭部は Prasat Sok Kraup (890-910頃) にも見られるとする。このガジャシンハは、大きな象のような鼻を高く掲げ、たくましい歯 (stout) をもっていることから、その頭部は、より象に近いとする。この例が初期のガジャシンハであることには異論はない。しかし、このガジャシンハは頭部が小さく、やや全体のバランスを欠いている。そして、後述のように、プリア・コー (879) にその先行例を見出すことができる。

第3段階のクメール・ガジャシンハは、バプオン (1060頃) に見られるとする (図9)。冠状のたてがみをもつのが特徴であるが、スールヤヴァルマン2世のガジャシンハのような髭や体の鱗状の模様は見られない (Roberts 2003 : 152)。

最も重要なガジャシンハはスールヤヴァルマン2世の治世 (1113-1150頃) に現れたとし、この時代に、ガジャシンハは、図像的地位を確立し、ついに「アナンタ蛇上のヴィシュヌ」において、ナーガであるアナンタの役を奪うに至ったとする。Roberts (2003 : 151) は、これを「アンコール文明史における顕著な図像学的革新」と称している。そして、その例として、バンテアイ・サムレ (12世紀前半) (Roberts 2003 : 153)、ギメ美術館のヴィシュヌ千体石柱 (Roberts 2003 : 146)、Wat Phnom Ta Mau (Roberts 2003 : 149) (図10)、プリア・カン (Roberts 2003 :

149) (図11) の例を写真で示し、その他の例もリスト (Roberts 2003 : 182) で示している。そして、Roberts (2003 : 140) は、このスールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハを、「頭部は象のような鼻と時に象のような歯をもつものの、その他はより獅子の頭部に似ている。象の頭部より小さく、象のようなこぶをもたない。下顎と歯は獅子のようである。上顎は歪められ、この形状は、数多くのクメールのマカラのものと共通している。スールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハは、常に、山羊髭を生やしている。古代クメールのシンハのレリーフや彫像も髭をもっている。髭はライオンの属性であると考えられていたのかもしれないし、ブラフマンの智を象徴するものかもしれない」と描写している。図10の Wat Phnom Ta Mau のガジャシンハは、図 9 と図11を繋ぐ特徴を示しているが、6 世紀に遡る遺跡のものであるということから、さらなる研究が必要であろう。

Roberts (2003 : 141) は、ガジャシンハとマカラとの混淆 (mankorn)、麒麟との混淆 (kulen)、タイ等におけるナーガとの混淆についても述べている。ただし、このスールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハは、顎鬚がシンハに由来するのであれば、ガジャシンハとマカラ (図12) の混淆と考えるべきであろう。胴体の鱗がそのことを示唆する。



図12 Makara (Bharhut)

そして、Roberts (2003 : 140) は、ジャヤヴァルマン 7 世 (1181-1219頃) の時代に、バイヨンなどの仏教寺院で広く使われるようになったことがスールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハの普及に大きな役割を果たしたと考えている。これが、タイ等におけるガジャシンハ=マカラ=ナーガの一体化に繋がったことは十分考えられる。その意味で、スールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハは確かに画期的なものであろう。

Roberts は、ガジャシンハに関して極めて広範な研究を行っている。しかし、残念ながら、タイ等における一体化したガジャシンハ=マカラ=ナーガに焦点を置きすぎて、アンコール遺跡におけるガジャシンハの変容の過程を十分に説明しているとは言い難い。そして、バンテアイ・スレイのガジャシンハにはまったく触れていない。

3. 南インドにおけるガジャシンハ並びにヤーリ

バンテアイ・スレイのガジャシンハを見る前に、インドにおけるガジャシンハを見ることとする。ただし、ここにおいては、数多い南インドのヤーリ (Yali) もガジャシンハの一種とみなすこととする。ヤーリは、その名がサンスクリットの Vyāla (凶暴な象) に対応し、「象の牙と蛇の尻尾をもつライオン」と説明されている。このヤーリにおいても、象でありながら実際にはシンハと化しているという状況が生まれているのである。なお、ヤーリは、祠堂の入口あるいは柱を飾って、寺院を守護する。除災の象と、強力で敏速なシンハという組み合わせであるガジャシンハは、最強の守護者であろう。ここでは、



図13

入口を飾るもの、柱を飾るものを、順番に考察していく（ただし、画像はインターネット上で採取した）。

図13のガジャシンハは、寺院の入口を守護する形で設置されている。このガジャシンハは、象の頭をもち、後ろを振り向く形で、鼻を長く伸ばし、その先端は渦巻状に丸められている。そして、長い牙をもつ。ミーソンのガジャシンハ（図2）に近い形である。ただし、その長い牙によって、象の鼻が頭から切り離されているようにも見えてしまう。そのためか、ガジャシンハの鼻は変化していく。

入口階段の上に山羊頭のヤーリ、下に象が置かれるという興味深い例がタミルナードゥ州のシヴァ寺院、ブリハディーシュヴァラ寺院（1002-1010）に見られる（図14）。この山羊頭のヤーリ（図15）は、象の長い牙を失い、口から長大な舌または水（？）を吐き出す形となっている。

東インド・オリッサ州のシヴァ神を祀るムクテーシュヴァラ寺院（950-975）には、柱を飾るヤーリに繋がる、女性の騎乗者をもつヤーリ（図16）が存在する。このヤーリは、明確に像の鼻をもつ。しかし、頭は獅子あるいは山羊化し、角をもつ。そして、鼻に花綱をもっていることは注目に値する。

さらに、南インド・カルナータカ州のシヴァ寺院、ナネーシュヴァラ寺院（11世紀中頃）のヤーリ（図17）は、頭を正面に向ける。タミルナードゥ州のシヴァ寺院、アイラーヴァテーシュ



図14 Subrahmanya Shrine, Brihadishvara Temple, Thanjavur



図16 Mukteshvara Temple, Bhubaneswar



図15



図17
Naneshvara Temple,
Lakkundi

ヴァラ寺院（大チョーラ朝寺院群）（12世紀）のヤーリ（図18）では、口から吐かれる水の先には、つぶされるようにマカラが置かれる。頭は完全にシンハと化している。

そして、カルナータカ州のシヴァ寺院、トリプラーンタカ寺院（1070頃）のヤーリ（図19）においては、口から吐き出されるものの大部分は背景の花綱と化し、口からはわずかな水が吐き出されるのみである。また、ヤーリには騎乗者が現れる。トリプラーンタカ（三城征服者）という寺院名、弓を引く姿からシヴァを想定したくなる。

図18と同じアイラーヴァテーシュヴァラ寺院のヤーリ（図20）では、吐いていた水は舌に変わる。背景と化した水の先端の渦巻の位置にはマカラがすわり、そのマカラが水を飲み込む、あるいは、吐き出している。ただし、このヤーリにおいては、神獣は角をもつようであり、シンハからも遠ざかり、むしろ山羊に近い。そして、この場合も、棍棒を振り上げる騎乗者がいる。

ヤーリは、また、柱の装飾として、建物を守護する役割を担う。そして、驚くべき多様性を示すことになる。

少し時代は下るが、タミルナードゥ州マドゥライのミナクシ女神とシヴァ神を祀るミーナークシー寺院（15-17世紀）の柱には多種のヤーリが見られる。図21は、まだぎりぎり象の頭部を持ち、足元の小象に鼻から食べ物を与えているように見える。図22は、頭部がシンハと化し、小象の上に立つ。くわえたチューブ状のものから水（？）を吹き出し、小象に与えている。図23では、チューブの先に小象の鼻がつながる。そして、図24のヤーリは、マカラの尻尾に噛み付いている。また、図25では、足元に小象を置くものの、小象とのつながりは失われ、完全にシンハと化している。



図18 Airavateshvara Temple, Kumakonam



図20 Airavateshvara Temple, Kumakonam



図19 Tripurantakeshvara Temple, Balligavi



图21 Minakshi Temple, Madurai



图22 Minakshi Temple



图23 Minakshi Temple



图24 Minakshi Temple



图25 Minakshi Temple



图26 Mukteshvara Temple, Bhubaneswar



图27 Konark Sun Temple



图28 Angkor Wat ©

これらの小象を抱えるヤーリと図19のヤーリ、ムクテーシュワラ寺院の花綱をくわえるヤーリ（図26）を考慮に入れば、オリッサ州コナーラクのスーリヤ寺院（1250頃）のシンハが象を押さえつける像（図27）がガジャシンハと称されることも理解できよう。

また、完全に騎馬となったヤーリも存在する。これは、アンコール・ワット周壁内側のデヴァターの上に描かれた騎馬像（図28）に繋がるものである。

4. アンコール遺跡の初期のガジャシンハ

少なくとも、最初期のガジャシンハは、プリアヤ・コー（879）のまぐさ石の花綱末端に見られる（図29）。このガジャシンハは、Robertsの第2段階のガジャシンハに対応するが、頭部はより象らしく、胴体の肉付きもしっかりしている。また、高く掲げた鼻は、花綱を掲げている。



図29 Preah Ko ©

5. ガジャシンハの転換点としてのバンテアイ・スレイ

バンテアイ・スレイは、ジャヤヴァルマン5世に仕えた王師ヤジュニャヴァラーハによって、ラージェンドラヴァルマン1世（治世944-969）治下の967年頃に建設が始まり、ジャヤヴァルマン5世（在位969-1000頃）在位中の990年頃に完成したとされるヒンドゥー寺院である。

このバンテアイ・スレイという一遺跡において、ガジャシンハの一連の変容を見ることが出来る。

アイラーヴァタに乗るインドラがヴリンダーヴァナに豪雨を降らす図の下のまぐさ石においては、両端が少し切り落とされているように思われるが、ガルダが両腕で抱える花綱（図30）の両側に、図8、図29に近いガジャシンハが見られる（図31、32）。ただし、その鼻の位置は、やや不自然で、とくに左側の図31のガジャシンハは、次の図34、35のガジャシンハへの移行が窺える。

次に、ヒラニヤカシプの腹を裂くヌリシンハの図を飾る花綱（図33）の末端には、マカラに吐き出されるガジャシンハ（図34、35）が描かれる。しかし、この場合、図29や図8に比して、鼻が短く、掲げる花綱は、斜めになっている。また、その短い鼻自体も獅子の鼻の上にただ置かれているように見える。ブダの乗り物の例（図5）に近い形である。

さらに、ラクシュミー女神に2頭の象が水を灌ぐ図（ガジャラクシュミー）を飾る花綱末端のマカラから吐き出されるガジャシンハ（図36）では、象の鼻が、上に突き出す舌へと変わっている。そして、くわえる花綱は、吐き出される水のように見える。水は獅子の口から直接吐き出されている。鼻とそこから吐き出される水が、花綱の模様と同化していったためではないだろうか。



図36 Banteay Srei ©

そして、その下のまぐさ石においては、ガルダが抱える花綱の両末端にガジャシンハが配されており（図37）、このガジャシンハは、花綱をくわえることなく、誇張された舌を上につき出し、丸めている（図38、39）。この舌のみを出すガジャシンハは、踊るシヴァ神の図の下にある花綱の末端にも見られる（図40）。ただし、その向きは逆になっている。



图30 (上)、31 (左下)、32 (右下) Banteay Srei ©

图33 (上)、34 (左下)、35 (右下) Banteay Srei ©



图37 (左)、38 (中)、39 (右) Banteay Srei ©



图40 Banteay Srei ©



图41 Banteay Srei ©



图42 Banteay Srei ©



图43 Banteay Srei ©

そして、ついにアンコール・トムの王のテラスのガジャシンハ（図1）と同様のガジャシンハが登場する。シヴァ神夫妻が安らぐカイラーサ山を揺する悪鬼ラーヴァナの図を飾る花綱（図41）、シヴァ神を射るカーマの図を飾る花綱（図42）、カンサを殺すクリシュナの図を飾る花綱（図43）の末端でマカラから吐き出され、コーナーを飾るガジャシンハである。図1のガジャシンハとの類似は一目瞭然であろう。

さらに、このほぼシンハと化したガジャシンハは、同じバンテアイ・スレイにおいて、ヴィシュヌの乗物（ヴァーハナ）と考えられるに至ったと推測される。その根拠は、図44である。ここでは、ブラフマーの乗物ハンサ（鶯鳥）とシヴァの乗物ナンディン（象）に挟まれる形で、よりシンハと化したガジャシンハが描かれている。これは三神一体（トリムールティ）を象徴していると考えられる。ガジャシンハがシンハ化したからこそ、こ



図44 Banteay Srei

の形を取り得たのであろう。ガジャシンハの頭部が象のままでは、ナンディンと重なってしまうし、ガルダでは、ハンサと鳥として共通する部分が多くなるのである。

Roberts の言う「スールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハ」がヴィシュヌの乗物となっていることも、このバンテアイ・スレイにおけるガジャシンハ解釈の延長線上にあるのである。

6. 残る問題点

バコン（881）の副祠堂のまぐさ石に描かれた花綱末端の神獣の中には、ガジャシンハと考えることができるものもある（図45、46）。これが、ガジャシンハであるならば、象の鼻のないガジャシンハの極めて早い例となる。ただし、これらのまぐさ石は、周囲の石と色が異なっている。これに関しては、先述の遺跡としてはやや時代が早すぎる Wat Phnom Ta Mau（Roberts 2003：149）（図10）の「スールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハ」と併せて、慎重な調査が必要であろう。

また、バンテアイ・スレイにおいては、シヴァ神を支える形でガジャシンハが使われている。図47の上部に描かれた妃ウマーとともにナンディンに乗るシヴァ神の図では、ナンディンの立つ地を、3体のガジャシンハ（図48）が支えている。図47の下のまぐさ石に描かれたナンディンに乗るシヴァ神の図でも、ナンディンの立つ地を支える2体の中の少なくとも左側はガジャシンハ（図49）である。インドにおいては、ガジャシンハ／ヤーリはシヴァ寺院に多く使われており、このバンテアイ・スレイもマンダバ（拝殿形式の建物）をもつシヴァ寺院であることを考えれば、ガジャシンハは元々シヴァ神と関係が深いことが推測できる。形としても、ガジャシンハはシヴァ神のナンディンと妃ドゥルガーのシンハの合体形であると見ることもできるのである。ガジャシンハをヴィシュヌ神の化身ヌリシンハ（頭がシンハで、体が人間）の変形であるとして、ヴィシュヌ神と結びつける考えもあるが、無条件に受け入れることはできない。現時点では、ガジャシンハが、クメール文化圏において、なぜヴィシュヌ神と結びつくようになったかは不明であり、今後の研究を待つものである。



図45 Bakong ©



図46 Bakong



図47 Banteay Srei ©



図48 Banteay Srei ©



図49 Banteay Srei ©

Roberts が指摘するように、タイを中心として見られるガジャシンハ＝マカラ＝ナーガ（＝クンビーラ）の混淆・広範囲な混同は、アンコール遺跡群においては、必ずしも顕著ではない。「スールヤヴァルマン 2 世のガジャシンハ」が唯一のものではないだろうか。アンコール朝の後に、このような混淆・広範囲な混同が起こったのかもしれない。

Roberts は、チャクリ（Chakri）のガルダが、ガジャシンハの姿をとったナーガに勝利しているとしている。このことは、ペルシャのシームルグが 7 頭の象を捕まえたガジャシンハを攻撃する図（図50）と併せて、さらなる研究が必要であろう。

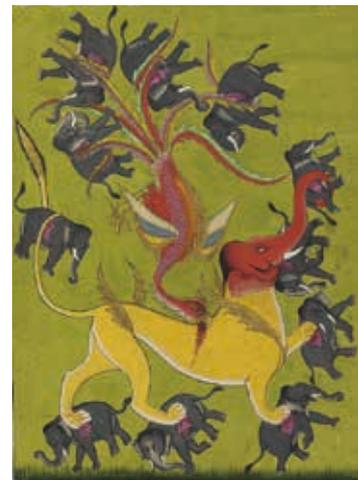


図50 Philadelphia Museum

7. まとめ

バンテアイ・スレイという一遺跡において、初期のガジャシンハからアンコール・トム of ガジャシンハに至る一連の経緯が見てとれることは、すでに述べた通りである。これによって、アンコール・トムのガジャシンハが、なぜガジャシンハと呼ばれ、ガルダと並んで立っているのが理解できる。王を守る存在としては、ガジャシンハは極めて頼りがいのある存在だったであろう。しかし、ガジャシンハが、なぜシヴァ神ではなく、ヴィシュヌ神の乗物となったのか、なぜバンテアイ・スレイにおいてそのような変容が起こったのかは、現時点では答えることができない。ナーガを愛するクメールの人々が、ナーガに敵対するガルダを避け、ガジャシンハを好んだということも考えられる。しかし、一方で、ガルダは、ガジャシンハの有無にかかわらず、その

人気を保ち続けていたのである。しかも、アンコール遺跡におけるガジャシンハの変容は、インドのガジャシンハ／ヤーリの変容（こちらの方がより幅広い変容を示しているが）と重なる部分をもつ。今後、ガジャシンハの存在も含めて、アンコール遺跡に見られるさまざまな図像を、もっと南インドあるいは東インドとの関連の中で見ていくことが必要になるであろう。

参考文献

- 石澤良昭 2009 『アンコール・ワットへの道』JTBパブリッシング
神谷武夫 2005 『インド古寺案内』小学館
佐藤和彦 2008 『インド神々の事典』学習研究社
菅沼晃 1994 『インド神話伝説辞典』（第五版）東京堂出版（初版：1985）
立川武蔵 2008 『ヒンドゥー神話の神々』せりか書房
立川武蔵 2009 『聖なる幻獣』講談社
デヘージア、ウィディヤ 2002 『岩波 世界の美術 インド美術』（宮治昭・平岡三保子訳）岩波書店
Mani, Vettam 1975 *Puranic Encyclopaedia* (in English). Delhi: Motilal Banarsidass.
Roberts, Tyson R. 2002 “Two vishnuite stale commemorating Suryavarman II.” *Siksacakr*, The Newsletter of the Center for Khmer Studies, Siem Reap, no. 5.
Roberts, Tyson R. 2003 “Manifestations of the *Gajasimha*’ of Suryavarman II” *Natural History Bulletin of the Siam Society*. 51(2). pp.139-184.
(Darsheimer, Nadine 2001 *Les collections du Musée National du Phnom Penh*. Ecole française d’Extrême-Orient: Magellan & Cie)

図の典拠

◎：筆者撮影 アンコール・ワット（2014/8/7）、アンコール・トム（2013/8/7）、バコン（2014/8/8）、バンテアイ・スレイ（2013/8/8）、プリア・カン（2014/8/8）、ミーソン（2016/8/6）

以下、インターネット・サイトは、2018年5月21日から30日の間に参照した。また、必要に応じて、適宜トリミングした。

図3：“Gajasimha.” *Wikipedia*. <<https://en.wikipedia.org/wiki/Gajasimha>>

図4：“Budha (Mercury): The Closest Planet to the Sun.” *Art of Legend India*. <<http://blog.artoflegendindia.com/2010/10/budha-mercury-closest-planet-to-sun.html>>

図5：Sampath, Gautham 2018/1/6 The answer to “How did ancient Indians find that there were nine planets (Navagraha) without any scientific technology?” *Quora*. <<https://www.quora.com/How-did-ancient-Indians-find-that-there-were-nine-planets-Navagraha-without-any-scientific-technology>>

図6：「カンボジアの国章」『ウィキペディア』<<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%B3%E3%83%9C%E3%82%B8%E3%82%A2%E3%81%AE%E5%9B%BD%E7%AB%A0>>

図7：「サンボール・ブレイ・クック」『遺跡ときとき猫』<<http://isekineko.jp/cambodia-samborpreikuk.html>>

図12：立川武蔵（2008：309）「パールフト仏塔欄楯に彫られたマカラ。パールフトの欄楯は『一般にはBC.150年頃とされているが、浮彫彫刻の様式からBC.100年以前には遡らないとする説も有力である』〔宮治1981：28〕。これは、種々残されているマカラの姿のうち、初期のものである」というキャプションがついている。

図13：「gajasimha - Google Search」『Pinterest』<<https://www.pinterest.jp/pin/83527768067052957/>> 残念ながら、どこの寺院のものかは突き止められなかった。

- 図14・15：「タンジャヴール：ブリハディーシュワラ寺院【チョーラ朝寺院建築の壮大】『「インド万華鏡」の旅へ』〈http://kaleidoscopeindia.hatenablog.com/entry/brihadeeswara_tanjavur14〉
- 図16：“Yali (mythology).” *Wikipedia*. 〈[https://en.wikipedia.org/wiki/Yali_\(mythology\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Yali_(mythology))〉
- 図17：“Nanesvara Temple, Lakkundi.” *WikiVisually*. 〈https://wikivisually.com/wiki/Nanesvara_Temple,_Lakkundi〉
- 図18：“Photo: “Airavateshwara Temple”.” *trip advisor*. 〈https://www.tripadvisor.in/LocationPhotoDirectLink-g297674-d1536747-i172446460-Great_Living_Chola_Temples-Tamil_Nadu.html〉
- 図19：“Western Chalukya architecture.” *WikiVisually*. 〈https://wikivisually.com/wiki/Western_Chalukya_architecture〉
- 図20：“South India photblog Tanjore, Trichy and Chettinad.” *Ampersand*. 〈<https://www.ampersandtravel.com/blog/2013/south-india-photoblog-tanjore-trichy-and-chettinad/>〉
- 図21：“Yali (mythology).” *Wikipedia*. 〈[https://en.wikipedia.org/wiki/Yali_\(mythology\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Yali_(mythology))〉
- 図22：神谷武夫（2005：45）
- 図23、24：デヘージア（2002：238-239）
- 図25、26：“Yali (mythology).” *Wikipedia*. 〈[https://en.wikipedia.org/wiki/Yali_\(mythology\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Yali_(mythology))〉
- 図27：“Timeless beauty of Puri-Konarak.” *india mike*. 〈<https://www.indiamike.com/india/odisha-orissa-f33/timeless-beauty-of-puri-konarak-t221452/>〉
- 図44：「バンテアイ・スレイのレリーフ」『アンコール遺跡』〈<http://angkor.gogo.tc/angkor/banteay-srei-relief.html>〉（2018年5月21日参照）（「ハンサ、ライオン、象」との解説がつく）
- 図46：“Makara (Hindu mythology).” *Wikipedia*. 〈[https://en.wikipedia.org/wiki/Makara_\(Hindu_mythology\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Makara_(Hindu_mythology))〉
- 図50：“Simurgh Attacking a Gaja-Simha Carrying Elephants.” *Philadelphia Museum of Art*. 〈<http://www.philamuseum.org/collections/permanent/88273.html?mulR=352584507%7C1893>〉